

いちご「女峰」の夜冷育苗による花成促進について

1. 試験のねらい

女峰の普及とともに、高価格が期待できる11月下旬出荷への関心が急速に高まりつつあったことから、花成促進技術の一方法として利用され始めた夜冷育苗について、その効果と実用性を明らかにするため、昭和60年及び61年の2か年にわたり検討した。

2. 試験方法

(1) 処理開始時期と開花、収量の関係：処理開始時期は図1-2のとおりで、2カ年とも採苗時期をそれぞれ組み合わせた。なお、処理期間は60年が20日間、61年は花芽分化するまでの期間(22日~17日)とした。

(2) 処理時の苗条件が収量に及ぼす影響：夜冷処理を8月22日から21日間行い、表-2のとおり苗の箱上げ時期、箱上げ時の葉数及び施設(3万本処理用)当たりの処理株数と収量との関係を検討した。

各試験とも箱上げ時に使用する培土はパーミキュライト2：ピートモス1の混合培土を用い、夜冷処理は図-1のように、また保温は10月5日に行った。

3. 試験結果及び考察

(1) 処理開始後花芽分化までの日数は22日(8月14日処理)~14日程度(9月1日処理)で、処理時期が遅くなるほど早まった。開花及び収穫始期は早期処理ほど早く、8月14日及び20日処理では11月中・下旬から収穫となったが、えき花房の発生には年次間差がみられ、とくに61年の遅れは9月下旬~10月上旬の高温が影響したと思われる。なお、収量は8月14日~20日処理が早期、総収量とも多収で、採苗時期は処理開始30~40日前頃が適する傾向であった。

(2) 苗の箱上げ時期は4日前より当日、葉数は4枚より2枚、処理株数は規定量より少ない2.25万本が、処理期間中のむれも少なく多収であった。

葉数はえき花房の開花や収穫始期に、また処理株数はえき花房の開花に影響がみられたのに対し、箱上げ時期の影響はほとんど認められなかった。

4. 成果の要約

夜冷育苗による花成促進効果は極めて大きく、8月20日から20日間処理することにより11月下旬からの出荷が可能で、収量的にも優れることが明らかとなった。なお、採苗は7月中旬が適期と考えられ、処理時の葉数は2枚程度、箱上げ後は直ちに処理を開始し、処理株数は施設の基準量よりやや少ない量で、むれを防ぐことが大切と思われる。

(担当者 栃木分場 長 修)

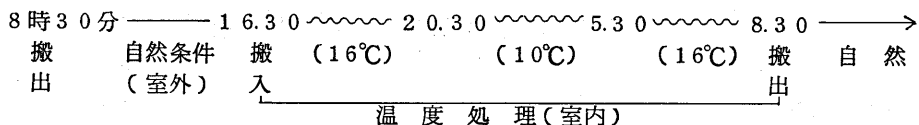


図-1 処理温度と1日の作業手順

表-1 処理開始時期が開花及び収穫始期におよぼす影響

処 理 時 期 (月日)	6 0 年 度				6 1 年 度			
	開 花 始 期		収 穫 始 期		開 花 始 期		収 穫 始 期	
	頂 花 房	えき花房	頂 花 房	えき花房	頂 花 房	えき花房	頂 花 房	えき花房
8. 14	-	-	-	-	10.17	12.10	11.19	2.6
20	10.27	11.22	11.24	1.3	22	15	27	9
26	30	25	12.4	9	26	19	12.5	15
9. 1	11.4	12.12	12	23	-	-	-	-
無 処 理	6	25	14	21.0	11.6	1.2	12.24	3.5

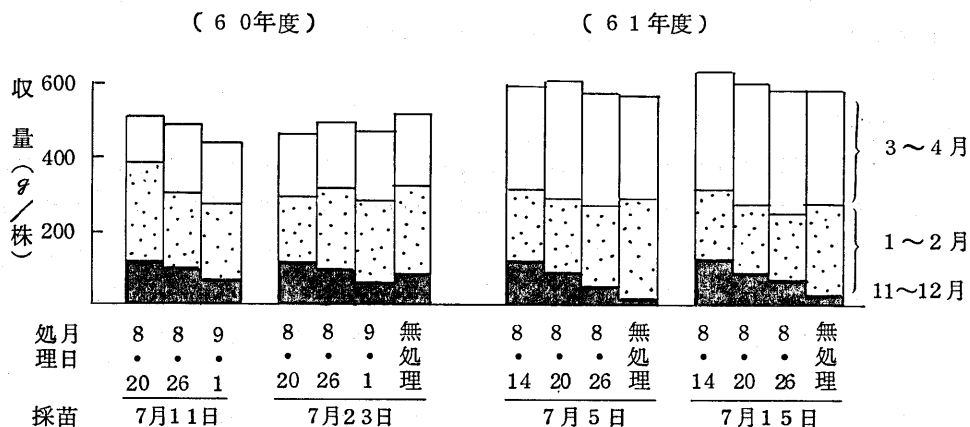


図-2 採苗及び処理開始時期が収量に及ぼす影響

表-2 苗の処理方法と開花、収量の関係(昭61)

処 理	開花始期(月日)		収 穫 始 期	収 量 (g/株)			計	
	頂 房	えき花房		11~12	1~2	3~4月		
箱上げ	処理4日前	10.23	12.15	11.30	94	170	308	572
	処理当日	23	16	12.1	102	168	323	593
葉 数	2 枚	24	20	2	94	160	346	600
	4 枚	23	11	11.29	103	179	285	567
株 数	2.25万	23	13	30	100	178	310	588
	3.00万	24	18	12.1	96	160	321	577